

呼びかけの練習をどうするか

目的意識と到達点を示す。

まず、なぜ呼びかけをするのかを子どもたちにしっかりと話ししていただくとよいでしょう。子どもたちに、ある活動をさせるときには必ず趣意の説明が必要です。これをしなければ学習活動には常に「やらされ」感がつきまといます。

その後、到達点を示してください。例えば、学芸会の劇の指導では「お客さんが泣くくらいの演技を」と私は言います。呼びかけなら、昨年の卒業式の呼びかけのビデオを見せて、「これくらいにかっこよく」と言ってもいいでしょう。

一時に一事を指示する。

例えば、呼びかけの指導をするには次のような指導項目がおおざっぱに言って考えられます。
立ち方、声量、スピード、間、息の吸い方、顔の角度。
これらを、バラバラにIPPENに教えてはいけません。
一〇分の指導時間なら、一つだけ教えるのです。

個別に評定する。

この呼びかけの指導は、向山洋一氏の有名な実践を追試したものです。

例えば前日こんな風に言っておきます。

「明日から、呼びかけの練習をします。明日は声の大きさだけを、先生は見ます」

次の日、1回だけよびかけをさせます。その後このように指導します。

Aさん、Bさん、Cくん、Dさん、Eくん、ちなさい。あなたがたは、体育館で聞こえるくらいの声になっていませんでした。明日もやりますから、がんばってください。

今呼ばれなかった人、起立。

あなた方は合格です。

明日もその調子でやりましょう。

これだけです。

個別に評定するから、子どもは教師の指導を「自分ごと」として聞けるのであって、「みなさんは～」という「みなさん主語」は個々の子どもたちには伝わりにくいのです。

呼びかけの練習で誰を取り上げ、全体でほめてあげますか

子どもたちの姿勢も声の大きさも、声の方向もいい。

さて、誰をほめてあげますか？

私には、ほめる規準が相当明確にあります。

いつも第一にほめる子は、決まっています。
私が、一番にほめてあげるのは次のような子どもです。

一生懸命に取り組んだのに、失敗してしまった子ども

この子は、深く傷ついている可能性があります。
その心のフォローのためにほめてあげるのです。
そして、その子をほめることで、周りの子は感じるのです。
「先生は、一生懸命に取り組んでさえいれば、間違ってもほめてくれるんだ。失敗をおそれないで思い切ってやろう」と。
教師は、「結果より過程が大事」といいながら、実は結果がよかった子どものみをほめがちなものです。
それでは、活動が息苦しくなります。
一生懸命に取り組ませる。しかし、失敗には寛容であるというのが大事なポイントです。
ただ、私は、結果にも相当にこだわりを持っています。
何かしらの行事では、多少強引でも結果をひねり出さなきゃいけないと思っています。
特に厳しい指導をした場合はです。
なぜなら、つらく苦しい思いをした、その結果失敗したでは、いったい子どもたちは何のためにがんばったのかわからなくなってしまふからです。
子どもには、失敗経験も必要ですが、基本的には成功体験が次への意欲になるからです。
そして、そうした成功体験は、むしろ結果にこだわりすぎる練習よりも、失敗には寛容である練習方法の方についてくるのです。

子どもの味方になる

たった一人でもその子の味方になってくれる人がいるか、いないか。
これはとても重要なことのように思います。
子どもは、様々な集団に属して生活をしますが、その中で1つの集団でも、いえ1つの集団の中のたった1人でもそういう人がいてくれれば、子どもは救われます。
ふつうは、家族がその役割を担います。
でも、そうでない子がいたら教師がしてあげたらいいのだと思います。
子どもは、冷たさで育ったり、成長したりすることはありません。
たとえ厳しくとも、突き詰めれば指導者の愛に気付くからこそ、変容するのでしょうか。

教師が変われば、子どもも変わる

学級を荒れさせないためには、私は授業の質を上げることしかないと思います。
一日に、5時間も子どもの時間をもらってるわけです。
その5時間が、つまらなく、興味も持てず、力もつかなかったら、それは拷問です。
子どもにしてみれば荒れるのが当然です。
力があり、エネルギーがある子どもたちならなおさらその荒れ方はひどくなります。
では、授業の腕をあげるにはどうすればいいのでしょうか。
いろいろなことがあります。
第一に教師が素直に学ぶ。

まず自己否定が大切です。自分はだめだということを認め、人に尋ね、本を読むことができるでしょうか。第二に言い訳しない。

例えば、テストの点数が悪いときに、「どうしてこの子はできないんだろう」ではなく、「この子をできるようにするにはどうすればいいのだろうか」と考えることができるでしょうか。

第三にひたすら子どもの事実に基づく。

どんなに、理論や理念がすばらしくとも、子どもをのばしていなければ意味がないのです。

また、どんな小さな伸びであっても子どもの変化を見逃さない目が必要です。

子どものことですぐに落ち込む人に限って、小さな子どもの変化が目に入っていないのです。

研究授業をいかに創るか

授業を公開しようとするとき、どのような準備をして、どんな手順で授業を創ったらよいのでしょうか？

私は、このことに明確な答えを持っていません。

それはなぜかという、そういうことを明確に書いた本を見たことがないし、先輩から「まず をしなさい」なんて教えていただいたこともないからです。

できるのは私のやり方を公開して、批判をいただくことだけです。

まず第1に、私は中教審や臨教審の答申を読みます。

現行指導要領が、どのような問題意識の元に改訂されたのかをつかむためです。

これは、現在その教科や領域で何が問題となっているのかをおおむねとらえるのに大変役立ちます。

このときに、文部科学省のHPは便利です。ただし注意することは、決してPC画面上で読むのではなく、プリントアウトしてファイリングしておくことです。

第2に指導要領を読みます。

必要箇所をコピーしたり、視写したりします。

これは、「突き詰めていくと私は何を教えようとしているのか」を見失わないためです。

授業を創ったり、あるいは授業をしているときには、授業の目的を見失いがちです。そこで、上のことが判断基準となって、授業がスマートにそして枝葉に入らなくなると思います。

第3に研究部の提案を読みます。

研究授業というのは、「検証授業」です。研究部の「研究仮説」を立証するものでなければ、いい授業であっても、スタンドプレーでしかありません。

以上二つは、簡単にまとめて言うと授業の哲学を鍛えると言うことです。

第4に教材を選定すると言うことです。

特に、総合や道徳の場合はこの教材選びが授業を決めます。

それで実感をいうと、この教材選びは、研究授業をすることが決まってから集め始めても遅いのです。

私は、例えば新聞切り抜きを普段からしています。

毎日のように使えそうなテレビ番組を片っ端から録画しています。

つかえそうな本は、教育雑誌でなくても出会ったその場で買うようにしています。

行った先では、パンフや資料などをもらいます。

学校掲示用のポスターは、はがしたらいただくようにしています。

そういうことを普段からしていて、使えるのはというと1/100くらいでしょうか。

おそろしく効率の悪い話です。

次ようやく発問を考えます。発問づくりは次号に譲るとして、授業というのはお湯をかけたなら3分でできるというのではなく、やっぱり格闘です。

授業者が、どれだけ悩み格闘したかで授業を深さが変わると思います。